

25時行動委員会・富山

# 通信特別号

2016.9

25時行動委員会・富山

(090-7744-0122 藤岡)

E-mail:25h.action@gmail.com

Url:<http://25h-action.blogspot.jp/>

チクショウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!  
ギカイカイトイ・自治創出!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクシ  
ョウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!ギカイ  
カイトイ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクシ  
ョウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!ギカイ  
カイトイ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクシ  
ョウ!チクショウ!チクショウ!議会解体・ジチソウシュツ!ギカイカイト  
イ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!  
チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!ギカイカイト  
イ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!  
チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!ギカイカイト  
イ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!  
チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!議会解体・ジ  
チソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクシ  
ョウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ  
・ジチソウシュツ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクシ  
ョウ!チクショウ!クショウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・  
自治創出!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チ  
クショウ!クショウ!チクショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・ジチソウ  
シュツ!ギカイカイトイ・ジチソウシュツ!チクショウ!チクショウ!チク  
ショウ!チクショウ!ギカイカイトイ・自治創出!チクショウ!チクシ

25時行動委員会・富山

はじめに  
インタビューにこたえて  
「市民最低必要アピール」

## はじめに

「富山市議会問題」が富山市内の巷を賑わしている？

——「市議会議員報酬」のお手盛りアップから始まって「政務活動費不正受給」が市民の批判を浴びて・・・ということなのだが、ナンカ小サインダヨナ。議員の小粒化と市民の議会への関心の縮小とが釣りアッチャッテ、小サナ「不正」・「フン」ト、小サナ嘲笑・小サナ「議会改革」ニ浮足立ッテ・・・・・・・・。

むろん額の大小の問題ではない、問題はこの小ささを生んでいる大きな構造、言ってみれば、この列島全域に広がる列島に生きる者の生の自治を切りつづめる巨大な支配・抑圧構造を、私・たち自身がどうするかなのだ。自分自身を切り裂くことが、同時にその巨大な構造を切り裂くことになる——そんな闘いをこの「富山市議会問題」という小さな端緒から始めることなのだ。

未練がましく付け加えるが、たまたま別のテーマを追いかけていたさなかに、この「問題」に出くわしたのだが、そのテーマとの関わりで、古参の『初期社会主義』者の堺利彦が1929年の初の「普通選挙法」の適用になる「東京市市議会議員選挙」に挑戦するというくだりがあった、その選挙がその前会期における議員の大規模な汚職を受けての「出直し選挙」であり、東京市民による「市政浄化」運動がどのような「成果」を生むかが注目されている展開になる・・・・。

奇しくもということなのだが、『市政浄化』などと言う言葉が懐かしくも、切なくも響く。私・たちの前に現出した小さな露頭の下に不可視の巨大な岩塊を掘り崩す営みは、例えば、堺利彦などという人にも繋がっているのだ、・・・嗚呼。

# 「富山市議会問題」に関する あるテレビ局からのインタビューにこたえて

(2016年9月16日)

Q 今回の一連の不正問題は、なぜ起きたとお考えになられますか？

A 基本的には、市民が議会というものをどういうふう考えているか、あるいは市民が議会というものをどうつuckingていきたいか、そのことのあるありようの表われ方ですよ。

議員の人たちのやっていることが、別にいいとは全然思いませんけれども、そのところだけに焦点を当ててアレコレ言ってみても意味がないと思います。何かあって辞めました。頭、下げました。はい、選挙やりましょう。だいたい、国会を含めて日本の議会というのは、たいてい、そのパターンで「処理」されていくわけでしょう。批判する側は、それを「みそぎで済ますな」とか言いますけれども、それ以上にすすんだことはないじゃないですか。われわれにしてみたら、冗談じゃないよ、という感じが強いですね。

市民が議会というものをどういうふう考え、市民が議会というものをどうしたいと思っていたかのあり様の関数です。議員たちは、それに敏感に反応しながら動いているわけです。そういうところだけは敏感なわけです。

Q 議員じたいは、今回7人が辞職しましたがけれども、(9.27現在辞職・辞意10人)実際もっている可能性が高いようなんですけれども、なぜ彼らはこんな「不正」行為をやってしまったと考えますか？

A 彼らは「不正」だと思っはいなかつたんでしょ。「問題」になつたから「不正」だと思われたんですよ。

私どもも遙か昔ですけども、一期だけ富山市議会議員をやつたことがあります。私のつれあいがその前に選挙に出て、何回か挑戦してやつと当選しました。そうしたら病気で亡くなつてしまつたものですから、どうしてもやる羽目におちいつて、私はそういうガラじゃ全然ないので、4年間やつたら閉口して辞めました。そのときも、いろいろ活動することの費用の問題があるわけです。議員が使う「政務活動費」、そういうものを考える感覚が違ふんですね。おそらく全然違ふんです。

「不正」ということは、指摘されたから「不正」なのであつて、彼らにとっては内在的に「不正」だという感覚はなかつたでしょう。いまもないですよ、おそらく。それだけのことです。

Q あなたが市議をやられていた当時と、今は変わっていますか？

A 私が市議会議員になったのは、1999年、20世紀の一番最後から4年間です。辞めたのは、2003年です。ですから、いまからかなり前です。私のつれあいが、何回か挑戦したのですが、それこそマスコミなんかには、「市民派が議員に挑戦する」みたいな言い方で捉えられていました。

そのころ、全国的にみても「市民派」といわれるような、いわゆる既成の政党に属さないけれども自分たちの政治へのかかわり方を表現したいという流れが、少なくとも私が議員になったころまではあるのですね。その流れは、それから後もまったくなくなっているわけではないし、いまもないわけではありません。「市民派」みたいに自分で言いたがるし、まわりもそう思うような人がいないわけではありません。けれども、その人たちが持っている基本的なセンスと、私どもがやろうとしたときのセンスは、やはり違うと思います。

私どもが一生懸命主張していた、例えば「市民参加」だとか「市民自治」だとか「議会を市民のものに」とか、そういうことばを、私がやったころから、誰が一番使い始めたかという、逆に行政なんですね。市の行政担当者の側がそう言いだす時代になりました。

お若い人たちに、おわかりになるかな、そういう時代の風潮が……。私どもは、新自由主義、ネオリベリズムの論理と言っていましたけれども。つまり、「市民」ということばをできるだけ使って、「市民の自己責任」としてことがあるんだという感覚です。いまもそれはあるでしょう。何かあるたびに、「あれは自己責任だよ」「こっちの問題じゃないよ」みたいなすり抜け方が、基本的に国会からはじめて、あると思うのです。それがずーっと日本に大きく浸透していく、ちょうどそのときだったのです。ですから、緊張感がすごくありましたね。

一時であれ、そうやって市民の側から政治に積極的にかかわろうとした動きが全国的にあった時代が、まちがいなくこの日本でもあったわけですね。今はむしろ逆に、そういうことが行政の側に、市の側に取り込まれてしまってきていて、(例えば「市民参加・参画」といったように)そういう意味では、市と議会との緊張関係というものが、私どものころとはずいぶん違ってきていると思います。

それともうひとつ、議員になるということの持っている意義というか価値というか、そういったものが少しはあったような気がするのです、そのころは。だから、自分はやらざるを得なかった面もあったからやったけれども、やろうとした。それなりの思いがあって、表現することに大きな価値があると思っていました。

今回そもそものことの発端になったのは、「議員報酬を上げる」ということを市議会自身が言い出したことです。もちろん、自民党会派が中心になって。市民の感覚からすると、「なによ、それは」という感じがまずあって、その辺からことが始まっているわけです。

「議員報酬を上げろ」というのは、彼らは彼らなりにリアルなことを言っていると

思います。つまり、議員生活をしていると、それなりのお金がかかる。かつては、割合とそういうことに対して悠然としてられるような人たちが議員になっていることが多かったと思います。そこに自分の生活のすべてがかかるということでは必ずしもない人が、かつての議員には多かったと思います。遡れば、町や村の名望家—その地域の名誉を背負って立って、外に向かって、「われわれの地域が望んでいることはこういうことだ」と言えるような。明治以来、市町村議会の議員は、だいたいそういうふうに振る舞ってきたわけです。そういう感じが、私が入ったころにはまだ残っていたように思います。今は、議員の方もそれだけやっていたら安泰というわけでもなくて、たいして金もないのに大変だ、という思いもあるのでしょう。

それから、今はかなり議員というものの自体、なる人自体の、基本的なモチーフがずっと低下していると思います。議員は小粒になり、他の党派に睨みを効かせるだけのありようをしている人はあまりいない。私が入ったころは、在職何十年という人がいて、それはそれでそれなりの見識もあるし結構な人だと思ったんですね。私なりに、(ああ、この人はそれなりに頑張ってきた人なんだな) と思って人もいたんですね。今その辺の人たちには全然そう思えない。かつてのような、議員になることの在り方について自分はぎりぎり考えて、ということもない。だんだんそういうことだから、議員をやっていることはメリットばかりじゃないんだという感じになっている。「議員というのは、なんか知らんけど、なんかの役に立ってるの」という感じは、市民の中にも深いと思います。

市がやることというのは、自分の生活にとってとても大事なことですよね。だけど、日本の県とか市町村というのは、地方自治体なんですよ。私・たちは、地方自治体じゃなくて地域自治体になれと言いたいわけです。地方というのは、中央と地方という関係でものを考えていく発想です。そうではなくて、地域は地域で自立する。私・たちは、中央の制度に対していかに自立するかが市の基本的なテーマであるべきだと思ってきたから、地域自治体というふうには呼ぼうとしたんです。

でも今は、地方自治体がどれだけオリジナリティを発揮できるか、それも大変心もとない。かつて地方自治を求める運動とか公害とか開発に伴う大きな問題があった時代には、自治体に対する住民からの凄い批判がありました。そういうことは、今は希薄になってしまっていますが。

自分の生活にとってとても重要なものだと思いつつ、だけど、オリジナルに意欲的に市がやってくれるという期待感は、どんどん薄らいできている。市がやっていること、市と市議会がコンビを組んでやっていること自体に対する関心なり意欲というものが、市民の側も薄らいできている。そのような市民の側のありようと議員になっている人のありようが、ちょうど釣り合っているんです。問題は、その釣り合いです。それをぶち壊さなければ、何も始まらないと思います。

たとえば、「市政をよくする」とか言って、議会に行って声を挙げたり、富山県警に刑事告発をしたりしたようですね。彼らは、要するに、「不正」をやったんだからちゃんと警察は取り締まりなさいと。私は、何でこんなことで警察の手を借りるのかな、

テメエデヤレナイデソンナコトイウナヨ！と思います。市民の税金を使ってやるわけでしょう。

市民は、市当局の長である市長と市議会の議員の両方を選ぶわけです。二元代表制と言って、両方とも市民の代表で、代表同士でやっているんですね。市民の側がよほど緊張感を持っていなかったら、ほとんど同じような発想でことを進めるようになるのは、ある意味当然です。そういうシステムを含めて問題にできなかった市民の側が、なんか勝手なことを言ったりすればいいわけですけども、なんで警察の手を借りてやるの？やりたいのなら自分たちの手でやれよ—私は基本的にそう思います。

Q 市民は、今回の一連の問題を受けて、どういうふうにかえ、動いていくべきだと思いますか？

A 私たちは、市議会であれ県議会であれ国会であれ、議会というものを自分たちでつくったという実感がありますか？自分たちにとって必要だから自分たちの手でつくったんだ！—そういう実感をもっていますか。

例えばアメリカでは、「タウンミーティング」というものがそれぞれの町にまずつくられます。「俺たちの町のことは俺たちが考えよう」と。そこから少しずつ積み重ねられて行って、「これは、システムとして議会というものをつくったらいいんじゃないか」というところへ行くわけですね。そういう歴史をもっています。日本の議会というのは、地方議会や地方自治体のあり方が、いまの日本国憲法で若干変わりますけれども、明治以来日本になかったある種の政治制度が、欧米から輸入されたものですね。自分がゼロからつくったことがあるという感覚をもって、いまこの日本列島のなかで生きている人は、ほとんどいないと思います。

そういう意味で、その原点に立って、自分たちはいかなる意味で議会を必要とするのか。そのことを市民が問い返さなければ、「みんな身体をキレイにして選挙で出直さない」とかそんなこと言ってたって、話にならないよ！というのが、私の基本的な意見です。

ですから、しばらく議会が機能しないならしないでもいいんじゃない。4年5年10年でも、機能しないままにしたらいい。だったら、われわれがそこに乗り込めばいいわけです。テメエは安全な位置に座っていて高みからなにか言うのではなく、地べたに下りて、自分たちがもう一回議会をつくり直す。だから、「議会解散」なんて冗談じゃない。議会は解体すべきです。一回解体してみろよ！と言いたい。それで、自分たちがどうできるのかということをやってみる。議会というものが、私たちが生活していくうえでなくてはならないものかどうか。なくてはならないものであるとすれば、どうするのか、ということ自分を引き寄せて考える。

出直すのは、別に議員たちじゃないんですよ、われわれ自身です。出直すのなら、ほんとうにゼロになれ！それをやらないで置いて、なにかものを言うということに、私はほとんど価値を認めていません。

いまマスコミのみなさんは、格好のテーマだと思って飛びついておられるのだろうけれども、「1年後も取材しますか？」と逆に聞きたいですね。そこまでやりますか？——そういう問題です。

Q あらためてまた聞きますけれども、市民はこの問題に、どのように向きあい行動を起こしていくべきだと思いますか。

A 私たちが生きていくためには、自分たちの身の回りのいろんないとなみが必要ですよね。それを私ひとりでどうこうするのではなくて、いろんな人とのあいだで共同のいとなみとしてやっていくことが生きていくということでしょう。それこそが社会ですよ。その共同のいとなみを、専門的にそれを担う人に預けるということを、人間の歴史のなかである段階から始めたのです。それがいまではあたり前になってしまって、市や市長に任せる、市議会に任せる。そういうことを全然疑ったことがない。だけど、それを一回疑ってみる。そのようにして自分の生活が組み立てられていくことが、ほんとうにいいと思えるのか。

2001年12月、アルゼンチンを襲った激しいネオリベリズムに抗して、アルゼンチンの人びとが「民衆蜂起」したとき、アルゼンチンの議会に向かって、「ミンナキエロ！ヒトリモノコルナ！」と言ったわけです。国家の代表制民主主義に対する、決定的な不信任の表明です。「ミンナキエロ！ヒトリモノコルナ！」ですよ！ヒトリモノコらなくなったときに、議会がゼロになった。そのときに、われわれはどうするのかということが、ほんとうに問われる。それを引き受ける覚悟があるのか、ということです。自分がとりくんだら無傷ではいられないような、そこからスタートするしかないんです。ですから、われわれ市民の手に、ボールがきているんですよ。

Q 市民の手にボールがきているからこそ、

A そうです。こっちから投げ返す必要があるわけですね。向こうが容易に受けるような球を投げて、しょうがない。相手が受け止められるかどうかというくらいの豪速球か、鋭いカーブなのか、とにかくそういう球をこっちが投げる、ということです。

Q 市民が、責任というか、もっと自分のこととして、ということですか。

A 「責任」ということばは、それでも甘いという感じがします。(痛み)ですよ。自分が生きてある部分を委ねている、それはこういうかたちでしかないと思う、そのことは私にとって痛いことではないか。(痛み)として、それを感じられるかどうかということだと思います。

Q 今回、もともと「議員報酬の引き上げ」が発端になったとありましたけれども、なぜ「議

員報酬の引き上げ」ということを議論しなければいけなかったんでしょか。その背景には、なにがあったのでしょうか。

A 要するに、議員の人たちが、あんまり割に合わないと思ってきたわけでしょう。「活動」するためにはこれだけ必要なんだと、彼らは彼らなりに思ったとしたなら、別にそうなんだと思います。そのときに、彼らの言う「活動」とはなにか、ということは問われない。彼らは問わなくても済むわけですね。ただ、それだけのことです。

それぞれの議員が自分の後援会の人たちに、なんとかを作ったとか、その人たちに報告したとか、架空のことがでてきていますけれども、そういうことを実際に忠実にやっている人は、あまりいないと思います。後援会というものは、単なる後援会です。

「お前、なにやっていたんだ？」という追及は絶対はない。お互いにべったりともたれあった空間です。議員の側は、これからまた選挙に出ようと思う限りは、「よろしくお願いします」とひたすら頭を下げています。それに対して、後援会の側は、「私たちの地域のためにがんばってください」とひたすら言いたいわけじゃないですか。そこで両者の利害が一致していて、それだけのことです。この世の中がどうなろうと、日本社会がどこへ行こうと、そんなことは全く関係ないですよ。

そんなことのために、政務活動費を「不正」に使ったとか、使わなかったとかいう話になっていて、しかも、それが数百億円といった巨額のお金に目がくらんでということではなく、たかだか、十数万円とか数十万円とかいったレベルのことなのです。こういう言い方をするとひんしゅくを買うのかもしれませんが、あほらしくて半ば笑っちゃう、というか。だけど、お金の額が問題なわけじゃない。いちいち自分の行動が問われるということが、議員にはない。送り込んでいる市民の側も、「オマエらの活動ってなんだったの？」と問うことがない。いい勝負していたんだと思います。

Q もし可能でしたら、あなたの考えを広げて、これからしゃべろうとしていることをお話しただけたらと思います。

A 政治にかかわるということは、私たちの生きている生活全体をどうするか、という問いと密接に分ち難いものなんですね。この社会をどうするのか、もっと大げさに言えば、この世界をどうするのか。そういうことに対する、なんらかの希望なり、野望なり、野心なり、そういうものを持つから、政治家になろうとするわけでしょう。だから、いま、地方の政治に対して、魅力がなくなっているということです。地域の政治から、国家を動かすみたいなことまで考えようとするのが、非常にできにくくなっていますよね。

かつての明治の日本では、「近代国家」としてどのようにスタートするかをめぐって「自由民権運動」とかいろいろとあって、わいわいわいわい言い合っていて、日本の今後みたいなものをそこからつくっていくことを、私はそれが 100 %良かったとは思っていませんけれども、でもそういうことを一回はやったことがあるわけですよ、わ



れわれも。それらの歴史の上に立っていることをもう一度捉え返して、「ゼロ」に立ち戻ってリ・スタートするべきなんです。

それなのに、どうして私たちはそういうことを一切忘れて、「おまかせ」にしているのか。「議会制民主主義」というのは、もっと分かりやすく言ってしまえば、「おまかせ民主主義」ということですよ。「民主主義」の前に「おまかせ」が付くのは、「黒い白鳥」と言っているようなものでしょう。「おまかせ」ということばと「民主主義」とは一つになれないはずですよ。だから、本当に「民主主義」ということを尊重するのであれば、「おまかせ」の部分を徹底的にどうするのかということを考えるしかないのではないのでしょうか。

私たちは、政治の結果によって、散々痛めつけられています。そのことを「返す」というところにまで、残念ながらまだまだ行き着けていない。だけど、どうも、政治家たちを心から信頼して心から彼らを先頭に進もうというようなことは、今はもう夢物語ですよ。

この前の国政選挙から、18歳以上の人が選挙権をもつことになりましたね。それで、一所懸命周りの人たちが、彼らに対する「政治教育」が必要だと言っているでしょう。ああいうのを聞いていて、なんだか笑っちゃうなあという感じがしています。

この日本の社会でも、いまから50年近く前では、高校生が学校をめちゃくちゃ追及した時代があるんですよ。「高校紛争」とか「高校闘争」とか言っています。つまり、生徒の自治を認めるかということ、学校側に迫るわけです。本当に生徒の自治を認めるということをするれば、「政治教育」なんてする必要は全然なくなります。自分の学校をどうしたいかということ、ほんとうに個々の生徒が考えることをすれば、「政治教育」なんかしてもらわなくて、生徒は変わります。

それを禁止したんですよ。日本の、今で言えば文部科学省が1960年代の終わりごろに。もうずーっと禁止しているわけですよ。で、いまになって、「選挙権、あなたがたにあります。どうぞ、意欲をもって日本の未来のために選挙してください」ですよ。——「高校生」ごと蹴っ飛ばせばいいのに、と思います。「おマエら、何言ってんだよ！ふざけんなよ！」と蹴っ飛ばしてくれればいいのに、と思います。「おれたちの自治を認めないで、何が政治に参加しろ、だ！」この一発で、いまの高校生への「政治教育」は、ぶっ飛ぶと思います。

同じことです。日本社会のどこの部分をとっても、自治ということがどんどん弱まってきている。学校の自治、まちの自治、地域の自治、極端に言えば、国家に対する自治。

私たちは、どういう自治を求めているのか。私たちはどういう自治をつくりたいのか。その〈問い〉につきると思います。ここであらためて「自治」ということばを、今回の市議会問題を解くときの外せないKEY概念として、ちゃんと置くべきではないかということが、私が一番言いたいことです。自分たちの生きている空間を自分たちが自治する、という感覚をこれ以上削られてたまるか！ということです。

## 〈後註〉

1. 以上は、あるテレビ局からの取材に対して、〈25 時行動委員会〉のメンバーがインタビューに答えるというかたちで行った発言を自前で「録音」したものを、収録したものである。
2. 若干のことを、補足しておきたい。
  - i. 9月24日の私・たちの「アクション」でも表現したのだが、私・たちはこのたびの「市議会」問題を市議会内で処理されていくことが可能であるとは、考えていない。なお、「議会に関わる市民最低必要アピール」は、9月24日のパフォーマンスに際しての「表現」である。
  - ii. 市内各処でいろいろな単位で、「市民評議会」を創り出すこと、その「市民評議会」とその連合が、私たちの生きる地域としての市をどう〈自治〉するかを追求する、その一環としてこの問題を追究する——この基本線に立たない一切の「改革論議」を、私・たちは認めない。
  - iii. 私・たちは、「市議会」の「解体」をこそめざすべきであって、どれだけの期間、「議会」が「空位」であってもいっこうに気にならない。市政については、まさに市民自身が「監視」すればいいのであって、私たちの生命／生存／生活／生産のためには、一時たりとも目／手をはなせない領域については、その領域の例えばNPOなどを中心にした「市民評議会」がチェックすればいいだけのことだ。
  - iv. 当面予定される「市議補選」は言うまでもなく、来年の「市議選」についても、私・たちは上のような「市民評議会」運動を以て対応する、言いかえれば、反選挙運動として、「市民評議会」創出運動を対置することを、考えている。
3. 以上の私・たちの「基本見解」に対する疑問・反論を期待する。そのような論議こそが、今求められているのだから。

## 「議会に関わる市民最低必要アピール」

### #イメージから変えよう！ 議会についてのイメージから変えよう！

「市民」に繰り返し成り変わろう。市に住む民から「市民」＝「市民自治」の担い手に成り変わろう。

「市民自治」の担い手に成ろう。市長－市議会を手足とする「市民自治」の担い手に成ろう。

「市民自治」によって、「市」を市民の「生のサンジカ」（市民が生き暮らしかう場所）として創り合おう。

### #イメージから変えよう！ 議会についてのイメージから変えよう！

「市民評議会」を創ろう。地域・職域・活動域・・・いろいろな単位で「市民評議会」を創ろう。

「市民評議会」——それは、市民が「市民自治」を考え合う「市民自治態」の連合。

「市民評議会」で、「議会」をどうするか考え合おう、当面「議会」はカラでいい、カラにしておこう。——市民の生命・生存・生活・生産に不可欠な市政の営みについては、それぞれの領域のNPO・組合など（それぞれの領域での「市民評議会」）の手で管理・監視すれば、それでいい。

### #イメージから変えよう！ 議会についてのイメージから変えよう！

「市民評議会」から「議会」をどうするかの方針を提起するまで、市「議会」の「補欠選挙」を停止しよう！「補欠選挙」を「保留」しよう！

「補欠選挙」の停止を市に申し入れよう！

さらに「議会に関わる市民高度必需宣言」を創り合おう！